

河田恵昭教授の災害リスク・コミュニケーション —人間化された自然・現在化された想定・極限化された数値—

Socio-psychological analyses of Professor
Yoshiaki Kawata's disaster risk communication

京都大学防災研究所

矢 守 克 也

Disaster Prevention Research
Institute, Kyoto University

Katsuya YAMORI

SUMMARY

Great social/human scientists, such as Sigmund Freud and Karl Marx, have highly keen senses of detecting subtle discrepancies between what people say and what people actually do by saying so. We must be very careful of this kind of discrepancy when we try to understand Professor Yoshiaki Kawata's disaster risk communication. We are sometimes impacted by his communication, without knowing it, differently from, and also, more than what he apparently tells us. This paper aims at clarifying socio-psychological mechanism of his communication style, which is characterized by the following three points: first, personified "nature," not objectively observable "nature;" secondly, damage estimation from his own unique retrospective point of view, not from standard prospective point of view; and finally, numerical information used to highlight on an extreme scenario of the coming catastrophes, not to describe an average one.

Key Words

risk communication, nature, damage estimation, numerical information

1. 言っていることと実際になしていること

フロイトにせよマルクスにせよ、偉大な社会科学者の探究には一つの共通点がある。それは、人が表面的に言っていることと実際になしていることとの間の乖離や矛盾—ギャップ—に対す

る鋭敏な感受性である。このポイントは、同じことを反対側から見ても通用する。つまり、自分が他者から表面的に言われたことと実際に他者によってなされたこと、ないし、自分が他者から実際に受けた影響との間にも、時に大きなギャップが存在する。しかし、通常、私たちは

そのことにあまり気づいていない。

もちろん、これは、特段複雑で難しいことでもない。たとえば、ある少年が、小学校の教室である少女にだけことさらに「ちょっかい」を出していたとしよう。この様子を観察すれば、フロイトでなくても、その行為は文字通りの意味をもつものというよりも、この年頃の少年にしばしば見られる「反動形成」、すなわち、その少女に対する好意の裏返しだということを多くの人が直観するであろう。

河田恵昭教授（以下、敬称を略してY.Kと記す⁽¹⁾）によるリスク・コミュニケーション、つまり、防災・減災をテーマに行われる講演や講義を聴いて、筆者がいつも感じるのはこの種のギャップである。Y.Kによって表面的に言われたこと、言いかえれば、Y.Kから伝えられた表層的なメッセージと、筆者が実際にY.Kから受ける影響との間に微妙なギャップを感じるのだ。平たく言えば、Y.Kの講演や講義には、言葉通りの内容以上の何かが含まれているような感覚を筆者はいつも受けるということである。そして、筆者の印象では、このギャップの感覚は一人筆者だけのものではなく、Y.Kの話聞く聴衆一般にも多かれ少なかれ当てはまるように思う。

本稿の目的は、このギャップを言語化してみることである。言いかえれば、Y.Kによる講演・講義がもつ独特のインパクトのからくりを、筆者が専門とする災害リスク・コミュニケーションの視点から分析してみようということだ。考察の視点としては、次の3点を掲げた。Y.Kにおける「自然」（人間化された「自然」）、「想定」（現在化された「想定」）、「数値」（極限化された「数値」）である。

2. 人間化された「自然」

Y.Kの学術的な基盤は、広い意味での自然科

学であって社会科学ではない。しかし、Y.Kの講演・講義には、独特の人間臭さを感じる。ただし、これは、Y.Kが本来の専門領域である土木工学等の領域を超えて、広く人間や社会を視野に入れた防災論・減災論を展開しているという意味ではない。それだけのことならすでにこれの目にも明らかであり、かつ他にも類似の研究者は存在する。

ここでのポイントはそうではなく、Y.Kが論じる「自然」そのものに、独特の人間臭さがあるということである。たとえば、以下は、Y.Kが多用するおなじみのフレーズである。「来たるべき南海地震に備える」^[1]、「迫りくる南海トラフ巨大地震」^[2]、「東海地震が都市直下を襲う海溝型巨大地震で…」^[3]、「地震発生直後、間髪入れずに津波が襲来する」^[3]、「32時間差という事例もありますので、いきなり大きな地震が来た時だけが一番危ないのではなく、時間差でやって来ることもあります」^[4]などである。

これらの表現は、私たちが対峙し立ち向かうとしている対象が、決して無機質な自然現象ではなく、独自の意志をもって自分たちを襲ってくる存在であるかのように認識されていることを示唆している。こうした存在を形容するのにふさわしい言葉を一つ見いだすとすれば、それはもちろん、「他者」であろう。不可解で攻撃的な意志をもった「他者」が自分たちのもとへやって来る、迫り来る、そして自分たちを襲う。Y.Kが、そのリスク・コミュニケーションにおいて実際になしていることの一つは、こうした構図のもとで防災・減災について思考するように私たちを誘うことである。

このY.K流の独特のアニミズム—人間化された自然—は、よりあからさまに明示される場合もある。一例をあげよう。「基調講演を行った河田恵昭教授は、『自然は人間社会の弱い部分を攻めてくる』、『自然も過去最高記録の更新を狙

っている』と、災害対策を通じて社会のあり方を考え直すべきと強調しました」^[5]。たとえば、ある領域における（人間が知っている限りでの）過去最大の地震がM8クラスだとして、自然は常にそれを越えるM9クラスの地震を引き起こそうと狙っていて、悪くてM8クラスだろうとの油断に乗じて私たちを攻めてくるというわけである。

誤解のないように付言すれば、自然災害と私たちが呼ぶ現象に人為性を完全に排除できない部分が存在することは事実である。たとえば、手抜き工事によって倒壊した建造物による被害、情報伝達の明確な失策によって生じた被害などである。しかし、Y.K.がなしていることは、そうした点の指摘にとどまるものではない。つまり、自然現象としてのハザードそのものとそれが引き起こす被害とは区別すべしという、これまでも散々繰り返されてきた陳腐な主張ではない。そうではなく、ふつう私たちが、そこまでは100パーセント自然現象（ハザード本体）だと見なす「自然」そのもののの中に人間臭さ—私たちを狙い、攻め、襲う意志をもった「他者」—を見ているのである。

ここで大切なことは、なぜ、このような特徴をもつY.K.に私たちが魅せられるのか、その理由である。なお、ここでY.K.に魅せられているのは、そのリスク・コミュニケーションに引きこまれ、その影響を自ら自覚している聴衆だけではない。そこにある種の引っ掛かり（たとえば、「少々センセーショナルな言い方に過ぎるのでは」といった批判的なコメントに代表される）をもつ聴衆も、まさに前述のフロイト的な意味でY.K.に魅せられている点も重要である。

Y.K.のもつアニミズム、すなわち、「他者」としての「自然」が自分たちのもとへやって来るという構図に聴衆が魅惑される理由は、もちろん、私たち聴衆の側が同じアニミズムを共有し

ているからである。つまり、私たち自身の中にも、Y.K.の働きかけに感応するアニミズムが宿っているからである。もちろん、Y.K.自身も、そして私たちの多くも、地震や津波そのものが純粋な自然現象であると知的には知っている。しかし、それでも、「自然」の中に、私たちは無意識のうちに「他者」を見てしまう。

なぜなら、地震や津波など「自然」がもつ著しく不確定で予期できない性質とは、「他者」の定義そのものだからである^[6]。このことの意味は、「他者」の位置に、自分たちが現在従っている根幹的な規範に真っ向から違背する他者たちを置いてみるとよくわかる。たとえば、阪神・淡路大震災と同じ年に発生した地下鉄サリン事件は、大震災とあわせて日本社会が直面した「二つの戦争」として語られた。それは、法（規範）そのものの根底的な無効化を伴う戦争が、あくまで法（規範）の範囲内でその内部における逸脱として定義できる犯罪以上の存在であり、未曾有の災害や戦争において、私たちは、「何を考えているのかまったくわからない」と形容せざるをえない不気味な敵意に満ちた存在、つまり、「自然＝他者」と対峙することになるからである。

本節の最後に、「人間化された自然」、別言すれば「自然＝他者」の構図は、防災・減災にとって前向きな意味合いももっていることを指摘しておこう。先に引用した「自然も過去最高記録の更新を狙っている」という言葉にヒントはある。この言葉は、むしろ、アニミズムを宿した比喩である。しかし、これは本質的な比喩である。なぜなら、「自然」が常に随伴する「想定外」に立ち向かう鍵が「他者」にあることをY.K.のこの言葉は示唆しているからである。

東日本大震災以後、「想定外」という言葉が世間を騒がせてきた。しかし、それを受けて、「今後、想定外のことも念頭に置いて対策を講じて

参ります」などと言われるとき、そこには明らかな論理矛盾がある。「それ」を念頭において対策をうつということは、「それ」がすでに想定されていること（「想定内」）を意味するからである。では、私たちは、どうすれば、純粋な意味での「想定外」に出会えるのか。

Y.Kが示唆するように、「想定外」（記録更新）を狙っている「自然」の代わりに、文字通りの「他者」の力を借りればいいのである。たとえば、「ここには津波は絶対に来ない」と信じている地域住民にとって、かつてその地点まで津波が遡上していた形跡を知る研究者は、自らの「想定外」を知る重要な「他者」である。あるいは、原発周辺地域の津波浸水想定を最大高5メートルとして対策を講じていた電力会社にとって、「でも、もし15メートルの津波が来たらどうなるの?」という素朴な、子どものような問いは、記録更新を狙う災害に立ち向かうこととまったく同等の価値をもつチャレンジ、つまり、自らの「想定外」に直面させてくれる「他者」からの貴重なチャレンジである。

3. 現在化された「想定」

「三大大都市圏の広大な海拔ゼロメートル地帯（576平方キロメートル、住民404万人）で、洪水、高潮、津波氾濫が起これば、必ず、地下空間は水没する」^[3]、「もし、この周辺で津波、高潮、洪水氾濫が起これば、間違いなく地下空間は水没する」^[3]、「巨大地震が起これば、四国各県はあらゆるロジスティックが全く不足する」^[7]、「日本のペットボトル備蓄は12日分しかない。被災地の様子が報道されると一斉に買い占めが起こり、あっという間になくなる」（大阪府防災会議準備勉強会における発言）。

Y.Kの講演・講義では、被害想定について述べたこれらのフレーズが独特の語り口でたたみかけられてくるのが通例である。それらが、多

く場合、詳細な数値データを伴うことの意味については4節で別途検討することにして、ここでは、その断定口調がもつ意味について考えてみたい。ここで問題にしたいのは、「想定にはいくつもの前提があるのだから予想には幅があり、断定は適切ではない」、「そもそも未来の事象についての想定なのだから、原理的に断定はできない」といった批判ではない。これらの批判は当然であり、Y.K自身それを知らないはずはない。むしろ、それにもかかわらず、こうしたスタイルのリスク・コミュニケーションには上記の批判が見落としている固有の意義があるという点をここでは指摘したい。

この点について参考になるのが、哲学者ジャン＝ピエール・デュピュイによる「灰をかぶったノア」のエピソード（寓話）を引いた大澤真幸の議論である^[8]。ちなみに、ノアとはもちろん「ノアの方舟」のノアである。

大震災がそうであるように、破局と呼びたくなるような出来事が起きたとき、私たちはしばしば相反する2つの感覚をもつ。まず、出来事が起きてしまうと、起きる以前には必ずしもそうではなかったにもかかわらず、それが起こったことは必然（不可避）であったと強く思えるようになる。「地震頻発国にこれだけ原発を作ってしまったのだから…」、「安全性に問題ありと指摘する声もあったのに、電力に依存した便利な生活を優先してしまっていたのだから…」というわけである。ノアの寓話で言えば、「あれだけ神を蔑ろにしたのだから、大洪水がおきても不思議ではない」という感覚がベースにあるということである。

しかし、非常に重要なこととして、他方で、破局的な出来事が起きると、これと正反対の感覚も同時に生じる。つまり、出来事が起きてしまったからこそ、あるいはおきてしまった時点から振り返ってはじめて、破局的な出来事を回

避できた可能性を痛切に感じとることもできる。「わずかでも地震、津波対策をしておけば…」、「原発に依存した社会についてもう少し真剣に考えておけば…」といった感覚である。しかも、事後になれば、事前には非常にハードルが高いように思っていたそれらの備えや対策をなすことは困難どころか、むしろごく簡単にできたことのように思えてくる。つまり、出来事までの過程を不可避の必然と見なす事後の視点だけが、逆説的にもそれと同時相即的に過去の中に出来事を回避しうる「他なる可能性」や「別の選択肢」が十分にありえたこと（必然ではなかったこと）を、まざまざと見せてくれるのである。

以上を予備知識とした上で、「灰をかぶったノア」を、大澤^[8]に拠ってごく簡単に紹介しよう。

ノアは、やがて来るかも知れない破局的な出来事について、周囲の人たちに再三警告していたが、だれも真剣にとりあってくれない。そこで、彼は、古い粗衣を纏い、頭から灰をかぶった。これは喪った肉親を哀悼する者にだけ許される行為だった。すぐに彼の周りに人だかりができた。「だれか亡くなったのですか?」、「亡くなったのはほかならぬあなたたちだ」。意外な回答を怪しむ人びとが「それはいつ?」と尋ねると、「明日だ、明日を過ぎれば、洪水は『すでにおきてしまったこと』になるだろう。…（中略）…私があなたの方の前に来たのは、時間を逆転させるため、明日の死者を今日のうちに悼むためである」。この後、ノアは自宅に戻り、方舟造りを再開する。晩になると、一人の大工が門を叩き、ノアに言った。「方舟造りを手伝わせてください。あの話が嘘になるように」。そして、さらにその後、屋根葺き職人がノアの自宅を訪ねた…。

ノアが、事後の視点を持ち込むことではじめて、人びとを動かしえたことがポイントである。当初ノアの警告が功を奏さなかったのは、彼の語りや働きかけが、通常の思考法—先行する原因と後続する結果のフレームワーク—の範囲内にあったからである。現在大洪水（出来事）の直前だから、つまり、それは、幸い「まだ」おこっていないのだから、今のうちにそれに対処しましょう。この種の呼びかけは、防災・減災のためのあらゆる取り組みが当然のように自明視して実践していることである。しかし、これは、必ずしも説得的ではないのだ。

他方で、ノアが灰をかぶった途端、つまり事後の視点に立って語りふるまいはじめた途端、人びとの態度は激変し大洪水に対する備えを開始した。言いかえれば、ノアが「まだ」おこっていない出来事をあえて「もう」おきてしまったものとして語り、かつふるまうという迂回路をいったん経た上で、出来事以前に回帰してきたことが人びとを変えたということである。

重要な点なので繰り返すと、たとえその出来事をどれほど精密に想定しようとも、また、それが切迫しているとどれほど熱心に訴えかけられようと、それが「まだ」これから先に起こることである限り、それに対する有効な対処をとることは容易ではない。しかし他方で、それが「もう」済んでしまったことになれば、その途端に、それを回避し得た可能性を私たちは生き生きと感じとることができる。それならば、「まだ」来ていないそれを、あたかも「もう」来てしまったかのように感受することができれば、すなわち、現在から過去へ向けた回顧の視線を、そのまま未来方向へ平行移動させて、未来から現在を眺めることができれば、未来に予想される破局的な出来事を避けるための方策をこの現在の時点においてより有効な形で実施することができるはずである。

このように考えると、Y.K.がその独特の口調でもって実際になしていることは、私たち聴衆を事後の視点に立たせることだと思えてくる。それに対して有効な対策を講じるためには、それが「もう」おこってしまったと思えるような感覚、つまり、「こういうことが起きるだろう」、「それも発生するかもしれない」ではなく、「こういうことが起こってしまうのだ」という断定（未来完了）の感覚が不可欠だからである。独特の断定によって、未来に関する想定が現在化されると言いかえてもよい。

ここでY.K.がなしていることは、「信と知の乖離」^[8]を埋めるための作業だと言いかえることもできる。今日、私たちは、未来の災害について知らないのではない（もちろん、まだ知られていないことは残存しているだろうが）、むしろ、情報過多と思えるほど、多くのことを知っている。だから、課題は知らないことではなく、「知ってはいるが、信じていないこと」の方である。断定口調とともにY.K.から生々しく伝わってくる破局の描写は、事後の視点を拠点に私たちにその発生を現実的なものとして信じさせる機能を果たしている。

よって、Y.K.に対して、「根拠は確かか、エビデンスは十分なのか」という趣旨のコメントが寄せられることがあるやに聞くが、この種の批判は、人が表面的に言っていることと実際になしていることとのギャップを見ない皮相的な批判である。エビデンスは知の根拠にはなっても、必ずしも信の基盤とはならない。むしろ、真の意味での信は、知（エビデンス）を欠くところにこそ成立することに思い至るべきである。このことの意味は、信が何かに対するコミットメント（何かに根拠なく賭けること）を伴うことを思えば容易に理解できる。たとえば、自分の友人に対する悪い評判（それを証拠だてるエビデンス）が周囲から噴出したとしても、にも

かわらず、その友人を信じ擁護しえたとき、初めてそこにもっとも純粋な形でその友人に対する信が存在していたと言えるだろう。

4. 極限化された「数値」

図1^[9]は、Y.K.がある講演会で示したもので、首都直下地震が襲うと想定されている首都東京の特徴と、最悪の場合、どのような社会・経済被害が予想されるかについて集約したものである。ほとんどの項目で、具体的な数値が示されていることがわかる。また、図2^[9]も、同じ講演会で提示された資料で、南海トラフ巨大地震による犠牲者の予想を示したものであるが、政府が公表した数値とは異なっている。これは、「昼間に発生した東日本大震災の死者・行方不明者は約1万9千人だったが、真夜中だった場合は3倍以上の約6万3千人になっていた可能性があると指摘。南海トラフ地震で被害を受けるとされる地域の人口が東日本大震災の被災地の6.3倍にあたることから、死者が約40万人に達する」^[10]として、Y.K.が独自に試算したものである。「あまりにも広域であらゆる被災形態が混在する」^[9]可能性があることを踏まえると、こうした最悪のケースも想定しうるとの指摘である。

さて、研究や実践の対象となる現象を認識しようとするとき、大別して、質的なデータを通してそれを見る場合と、量的なデータを通してそれを見る場合とがありうる。もちろん、実際には両者の中間的なケースが多いが、この両者は、多くの場合、かなり異なった認識を研究者に提供することから、これら2つのタイプのデータの関係性をどのように考えるかは、常に重要な課題となる。ここでは、かつて筆者が提示したように^[11]、この点について非常に有益な視点を提供している見田宗介の古典的な考察に依拠して^[12]、Y.K.が提示する「数値」（量的なデ

首都直下地震による社会・経済被害

1. 東京特別区の昼間人口約1,171万人で夜間人口より31%多い（昼夜間で被災人口が大きく変わる）。
2. 首都圏の外国人居住者数が約58万人、訪日外客数は44万人/月で日本全体の約44%および約65%を占める（災害弱者となり、海外の救援隊が多数派遣される）。
3. 特別区の火災危険度の高い地区に病院や福祉施設が多数あり、入院患者や入所者等の避難が必要である（多数の支援要員、収容施設が必要となる）。
4. 首都圏で病院の入院患者が約26万人いる（安全確保や治療継続が必要となる）。
5. 特定機能病院が21院存在し、都心部に13院が集中している（高度医療の提供が必須となる）。
6. 大企業（資本金10億円以上）本社の62.7%が首都圏に集中している（意思決定や決済機能が滞る）。
7. 日本銀行や主要な金融機関による金融決済システムが被災する（決済件数：約1億件/月、231兆円/月に支障が発生する）。
8. 首都圏における燃料の消費および生産量が影響をうける（それぞれ全国の約31%および約32%を占める）。
9. 首都圏で年間約1兆円（約28億円/日）の食品製造と全国の温度管理が必要な食品の約47%が流通している（大規模な食料品不足が起こる）。
10. 地下鉄や地下街で大混乱が発生し、人的被害が拡大する（多様な被災形態が混在する）。
11. 医薬品卸売業者の被災により、全国の約14.9%の薬品出荷が不可能となる（大量の医薬品不足が起こる）。
12. 木造住宅密集地域で延焼火災が懸念される（地震直後の風の条件が被害を支配する）。
13. 東京湾沿岸の埋立地や新興住宅地域の盛土で液状化被害が発生する（水道管などが破損し、消火活動ができなくなる）。
14. エレベーター停止による多くの「閉じ込め」が発生し、超高層ビルで停電・断水が発生して、超高層難民が多数発生する（あまりに多く、避難所に収容できなくなる）。
15. 高層、超高層ビルがやや長周期の揺れで共振現象を起こし、家具、什器の転倒やパイプ類の落下、破損・漏出が起こる（長期にわたって居住不可能となる）。
16. 大量の要援護者（約1,050万人）への対応が必要となる（支援要員が不足する）。
17. 約11,000の保育所、幼稚園、小学校、特別支援学校と約26,000の社会福祉施設への対応が必要である（支援要員が不足する）。
18. 東京湾沿岸に立地する火力発電所（約3,000万Kw）の電力供給力が大幅に低下する（長期の停電が必定である）。
19. 避難所で最大700万人の住民が避難生活し、食料品、飲料水が長期にわたって不足する。これが全国に報道され、全国各地のスーパーやコンビニから食料品や飲料水がなくなる。

図1 首都直下地震による社会・経済被害（Y.Kによる集約）

南海トラフ巨大地震の犠牲者数
（各府県最大犠牲者数）

大規模すべり域 都府県名	東海地方	犠牲者数	近畿地方	犠牲者数
	静岡 ①	114,300	大阪 ⑩	7,800
	愛知 ⑦	27,000	兵庫	5,200
	三重 ④	44,800	奈良	1,700
	千葉	1,600	和歌山 ②	81,300
	東京	1,500	徳島 ⑥	33,300
	神奈川	2,900	広島	1,700
	計	192,100	計	131,000
大規模すべり域 都府県名	四国地方	犠牲者数	九州地方	犠牲者数
	高知 ③	50,400	大分 ⑧	16,900
	香川	4,000	宮崎 ⑤	42,900
	計	54,400	鹿児島	1,270
			愛媛 ⑨	13,200
			岡山	1,800
最大数の総計	453,570人		計	76,070

各府県の犠牲者数が千人以上の場合を集計

図2 南海トラフ巨大地震による犠牲者数（Y.Kによる集約）

ータ)の意味について考察してみよう。

両者が抱える長所・短所—「たしかだが、おもしろくない」量的なデータ、「おもしろいが、たしかさがない」質的なデータ^[12]—について、それぞれの短所を埋め合わせる方向で何らかの妥協的な形態を見いだすことは、問題の根本的な解決にはならない。妥協的な形態とは、たとえば、対象がもつ少数の側面だけしか把握できないという量的データの短所を、多変量のデータ収集と解析によってカバーするとか、逆に、データの評価や解釈が恣意的との批判を受けることが多い質的なデータについて、たとえば複数の評価者の解釈を相互比較して、平均的なものを採用することでカバーするとかいった形態である。しかし、こうした妥協戦術は、多くの場合、中途半端なものに終わる。

むしろ、重要なことは、『『質的な』データはまさに『質的な』データとしての、『量的な』データはまさに『量的な』データとしての、それぞれに固有の持ち味ないし利点を最大限に活かせるような仕方の結合^[12]である。むしろ、ここで直ちに問われるべきは、質的、量的それぞれのデータの、何が固有の持ち味ないし利点なのかである。上記の主張を実践した見田の著名な論考「まなざしの地獄」^[13]とそれに対する大澤真幸の解説^[14]が、この問いに対してきわめて明快な回答を準備している。

「まなざしの地獄」は、連続殺人事件の死刑囚N.Nの生涯を、その背景となる高度経済成長期の日本社会の構造変動とともに描いた著作である。そこには、N.Nの悲惨な家庭環境を含む生い立ちから、田舎を嫌悪し脱出してきた「金の卵」としてのN.Nが東京(都市)で味わった挫折と絶望、そして、連続殺人に走り獄中の人となるまでの経緯が、同人を取り扱った記録文書やN.Nが獄中で書いた文章などを駆使して、「質的」に分厚く描かれている。注目すべきは、そ

れと同時に、N.Nと同時期に東京に流入してきた青少年を対象にした質問紙調査の結果など、一見とりたてて注目すべき点もなさそうな「量的な」データが同書にいくつか登場することである。この中の一つに、「東京で就職して不満足な点」について尋ねた質問項目がある。この項目に対して、最も回答率の高かった選択肢は「落ちつける室(へや)がない」というもので、自由時間が少ない、仕事や職場への不満や、友人関係への不満などをおさえてトップとなっていた。

この一見遠く離れているかに見える2つのデータ—「質的な」データと「量的な」データ—が、同書では、「まなざしの地獄」というコンセプトで見事に結びつき、見田自身が唱える「固有の持ち味ないし利点を最大限に活かせるような仕方の結合」をみせる。「まなざしの地獄」とは、「ひとりの人間の総体を規定し、予料するまなざし」である。具体的には、N.Nを、田舎者を示す言葉のアクセント、からかいの対象となった顔の傷といった具象的な表象や、学歴や出生地といった抽象的な表象で代表させ、都市の資本のための安価な労働力の供給元たる田舎からやってきたN.Nという〈関係〉でもってN.Nをまなざす視線である。これは、もちろん、N.Nを絶望の淵へ追いやり、犯罪へと駆り立てていったまなざしでもある。

ここで、見田^[13]は、「このような社会構造の実存的な意味を、N.Nはその平均値においてではなく、ひとつの極限値において代表し体现している」と指摘する(傍点は引用者)。ここで、平均値としてあらわれている現象と位置づけられているものこそ、「落ち着ける室がない」を選択した数多くの東京流入者たちである。つまり、東京(都市)において執拗にN.Nをとらえた「〈関係〉からの自由への憧憬」が、言いかえれば、自らを突き刺す社会のまなざしからの遮蔽

物を切望する N.N の焼けるような思いが、数十倍に希釈された平均的な表れとして、多くの「金の卵」たちが求めた「落ちつける室」が位置づけられているのである。

要約すれば、目の前にある研究対象が、私たちが見ようとしている現象全体をどのような意味で代表しているのか—代表性—という観点に立って、研究対象を認識するときの方向性を大きく2つに分けて考えることができる。それが、「平均化」と「極限化」である。「平均化」とは、広義の平均値が全体を代表していると考えることである。「平均化」は、上例がそうであったように量的なデータと親和性が強く、対象（たとえば、「金の卵」たち）の数量的な属性をとらえるには好適である。他方、「極限化」とは、個別の対象に「萌芽的に見られる動的な傾向性のベクトルの収斂する先」^[14]をとらえようとするものである。すなわち、「平均値に近い事例においては、曖昧なままに潜在化したり、中途半端な現れ方をしたり、相殺し合ったりしている諸要因がより鮮明な形で顕在化」^[13]している事例をとりあげることで現象全体を代表させるのである。「極限化」においては、N.N の分析がそうであったように、通常、質的な分析がより威力を発揮することは言うまでもない。

ここで Y.K における「数値」に立ち戻ってみると、それが、「極限化」を推進する方向で利用されていることがわかる。たとえば、現在、日本社会全体に都市部への人口集中が進む傾向性があるが、その傾向性が収斂する先はまさに首都東京である。よって、首都東京の社会的特徴を踏まえつつ、そこを最悪のパターンで巨大災害が襲った場合について数値をあげて検証する作業は、まさに「萌芽的に見られる動的な傾向性のベクトルの収斂する先」について検討することに他ならない。Y.K の「数値」には、関西圏や中京圏はじめ数多くの都市部が巨大災害に

見舞われたときには多かれ少なかれ露呈すると予想される都市型災害の特徴が、都市化という全体的トレンドの極点にある東京の「数値」として示されているということだ。あるいは、南海トラフ巨大地震が「あまりにも広域であらゆる被災形態が混在する」最悪の形でおこった場合について数値を示すことも、まさに「平均値に近い事例においては、曖昧なままに潜在化したり、中途半端な現れ方をしたり、相殺し合ったりしている諸要因がより鮮明な形で顕在化」することを意図したものであろう。

要するに、Y.K が多くの「数値」を示すことで実際になしていることは、通例、それと親和性のある「平均化」ではなくて、むしろ「極限化」の作業なのである。よって、こうした種類のリスク・コミュニケーションに関して散見される批判、たとえば、「次の災害がそんな極端な最悪ケースとは限らないでしょう、むしろ発生確率は極小だ」はそれ自体事実ではあるが、Y.K が提供する「極限化された数値」がもつ効能を看過した論評だと言わねばならない。また、より肝心なこととして、「極限化」は、極端なケース、したがって一般に発生確率の低いケースの分析に対してのみ有効だというわけではないことにも気づく必要がある。「極限化」は、平均的なケース、したがって一般に発生確率がより高いケースの分析に対しても必要かつ有効である。私たちが、「平均化」だけを念頭に標準的なケースだけを注視していると見逃してしまいがちな事象を増幅して見せるための拡大鏡としての役割が「極限化」には備わっているからである。Y.K における「数値」は、この拡大鏡のようなものと理解すべきである。

5. 「特殊性・固有性」対「普遍性・一般性」

本稿では、Y.K という特定の個人に焦点を当て、その災害リスク・コミュニケーションの特

徴を、人間化された「自然」、現在化された「想定」、極限化された「数値」、以上3つの視点から分析してきた。このような分析に対しては、「特殊な個人がもつ固有性に光を当てた個別事例の分析だけから、その結果を一般化することはいかなるものか…」といった常套的とも言える批判が寄せられることが多い。しかし、本稿は、Y.K という特殊なケースに関する分析を媒介にはしているが、決してY.K の属人的特徴を明らかにしたり、それに論評—それが崇拜・尊敬であれ、逆に批判・反発であれ—を加えたりすることを目標にしたものではない。そうでなく、あくまでも、災害リスク・コミュニケーションに関する普遍的な知見を提示することを目的とした論考である。

本稿で展開したY.K の固有性に関する個別的な分析が、その他多くの災害リスク・コミュニケーションに関する研究群を一つの全体として見たとき、その中の「極限值」としての価値をもっている点に気づくことが死活的に重要である。すなわち、Y.K に関する分析は、災害リスク・コミュニケーション研究における「平均値に近い事例においては、曖昧なままに潜在化したり、中途半端な現れ方をしたり、相殺し合ったりしている諸要因」をより鮮明な形で顕在化させる機能をもっているのだ。たとえば、2節で論じたように、Y.K において極限化された形で顕在化している「人間化された自然」は、多くの人びとが潜在的には有している認識であり、実際、「高さ20メートルを超える巨大な津波が襲ってくる可能性があるのです」といったフレーズは、テレビ番組など一般にも使われる。しかし、この事実—すなわち、多くの災害リスク・コミュニケーションが「人間化された自然」という戦略に依拠していること—は、「平均値」に近い大多数の事例に「平均的」な視線を注ぐタイプの研究からは明確には見えてこない。な

ぜなら、その事実は、「平均的」なケースでは曖昧なまま潜在化していたり、中途半端な現れ方をしていたりするからだ。それは、本稿でそうしたように、Y.K という極限的なケースを適切に見極めて全体から抽出し、その固有性に対する集中的な考察を試みてはじめて明らかになる。「特殊性・固有性」こそが、逆に「普遍性・一般性」へと反転してくるわけだ。

この意味で、少数事例研究に対する前記のごとき批判が、こうした戦略—極限的な少数事例を分析することを通して、一般性を標榜した分析や考察が逆に取り逃しているタイプの普遍的な事実を見いだそうとする戦略—を欠いた平板な事例研究に向けられているとすれば、その限りにおいて、それは正当なものである。しかし他方で、そうした批判が、ここで論じているような「特殊性・固有性」と「普遍性・一般性」との間にある複雑で、ときに逆説的な相互規定関係に関する洞察を欠落させたまま、たとえば、「一定のサンプル数を伴う研究は普遍的な知見を提供するが、少数事例の研究はそうでない」といった陳腐で常套的な理解を無反省に受容してのものだとすれば、その批判自身が厳しい批判にさらされることになるだろう^[15]。

注

- (1) 筆者にとって河田教授は大先輩の一人である。こうした論考の中で、考察の対象として登場いただくのは、もちろん僭越の極みである。しかし、その類いまれなリスク・コミュニケーションのスキルは、それ自体として分析に値するとの思いを実現すべく筆をとった。Y.K という略号や論考中の無機質な言いまわしも、本稿の中では河田教授に対してあえて客観的な立場を保持したいとの気持ちからである。

最後になるが、本稿の執筆や公表を快く了とされた河田教授に心よりお礼申し上げたい。

参考文献

- [1] 河田恵昭・西上欣也(1999). 来たるべき南海地震に備える, 自然災害科学, 18, 137-163.
- [2] 河田恵昭(2013). 迫りくる南海トラフ巨大地震, 無限大, 133, 28-34.
- [3] 河田恵昭(2013). 南海トラフ巨大地震の被害拡大と減災課題, 都道府県展望, 659号, 10-15.
- [4] 大阪府南海トラフ地震災害対策等検討部会(2014). 大阪府第5回南海トラフ巨大地震災害対策等検討部会議事録
<http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/20357/00000000/gijiroku.pdf>
(2016年1月1日確認)
- [5] 多田隆一(2012). 多田隆一のブログ 公明党大阪府本部「防災フォーラム」に参加!
<http://tadaryu.blogspot.jp/2012/05/blog-post.html> (2016年1月1日確認)
- [6] 大澤真幸(2009). 虚構の時代の果て ちくま学芸文庫
- [7] 河田恵昭(2011). 災害対応に必要な日常連携とネットワーク 四国防災・危機管理特別プログラム開設記念講演会記録
http://hot-relief.cocolog-nifty.com/blog/files/130417_kouen.pdf
(2016年1月1日確認)
- [8] 大澤真幸(2012). 夢よりも深い覚醒へー3.11後の哲学 岩波新書
- [9] 河田恵昭(2012). 大規模災害への備えと復興・復旧への官民の役割 関西情報センター「南海トラフ巨大地震への備え講演会」資料
http://www.kiis.or.jp/bousai/pdf/121206_1.pdf (2016年1月1日確認)
- [10] 朝日新聞社(2012). 南海トラフ地震「死者40万人の可能性」河田教授試算 朝日新聞(2012年7月6日付)
<http://www.asahi.com/special/bousai/OSK201207060147.html>
(2016年1月1日確認)
- [11] 矢守克也(2013). 社会実践のパラダイム やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・秋田喜代美・能智正博・矢守克也(編著)「質的心理学ハンドブック」 新曜社
- [12] 見田宗介(1979). 社会意識分析の方法 「現代社会の社会意識」 弘文堂 pp.122-180.
- [13] 見田宗介(2008). まなざしの地獄 河出書房新社
- [14] 大澤真幸(2008). 解説 見田宗介「まなざしの地獄」 河出書房新社 pp.99-122.
- [15] 矢守克也(2015). 量的データの質的分析ー質問紙調査を事例に, 質的心理学研究, 14, 166-181.

(原稿受付日: 2016年1月10日)

(掲載決定日: 2016年1月30日)